近代歌壇の名花

山川登美子

髪ながき
少女とうまれ
白百合に
額は伏せつつ
君をこそ思へ

（恋衣　明治三八）

うつつなく
消えても行かむ
わかき子の
もだえのはての
歌ききたまへ

（明星　第十号
明治三四・一）

平成４年６月２日―６月28日

福井県立若狭歴史民俗資料館
〒917-02 小浜市遠敷2－104 TEL 0770-56-0525

ごあいさつ

福井県立若狭歴史民俗資料館長　山本　和夫

今日にあっても、若狭における芸術空間の最先頭に輝く山川登美子のミニ展を催しました。

わが歴史民俗資料館では、三年前、「山川登美子全集」の編者である坂本政親福井大学名誉教授を迎え、登美子を語っていただきましたが、このミニ展はその延長線上にある行動です。

周知のごとく、山川登美子はあと三ケ月で三十才という春、夭折した天才歌人です。与謝野鉄幹を先達として、晶子、雅子（茅野）と手を携えて前進したロマンチシズムの星々です。このロマンチシズムは大正デモクラシイの母親ともいえましょうか。

登美子は、この世にあった年月は、短かかった故に、遺された作品は、残念ながら数少なく、約一千六百首です。

この遺作を、狭く、浅く、VS鉄幹、VS晶子に限定して享受しても、深甚なる興趣が錯雑します。しかし、その狭さの中に逡巡せず、広い広いグローバルな空間に認識を拡大すれば、純真な文人山川登美子が浮び上がります。

私たちは、さまざまな角度から、広く山川登美子と付き合うべきです。これまでの登美子論は、VS鉄幹、VS晶子の狭さに屈折しすぎていたともいえます。文学者山川登美子の研究は、これからだといっていいかもと、私は思います。そう考え、このミニ展も、そのきっかけの一部になればと思います。

ところで、山川登美子の歌碑は、小浜公園の高成寺山の麓にあります。この碑を建てたのは、海軍士官の土田数雄です。彼は山川登美子の純粋な賛美者でした。そして若狭における山川登美子研究の第一人者でした。竹西寛子女史のすぐれた評論集「明星の歌人　山川登美子」の巻末、「抄録テキスト」の中の一行に、ちょっと顔を出していますが、戦後（昭和二十五・六年）私は「日輪」という小さな同人雑誌を主宰していました。この「日輪」に、土田数雄は「山川登美子論」をひっさげ、同人として参加していました。

彼は、今はこの世にありませんが、生きていたら、このミニ展を、もっともっと、意義あるものにしてくれたであろうと思い、地団駄踏みながら、土田数雄のように、山川登美子賛美者が、若狭に輩出することを念じます。

このミニ展を開催するにあたり、登美子を愛する各位にいろいろと、協力、助言をいただきました。深くお礼申し上げます。

山川登美子の生き方

貴志真人

山川登美子には、「薄幸の歌人」という言葉がふさわしいように思われています。たしかに彼女は、人生における何回かの転機に、数々の不運や不幸に遭遇していますが、経済的な面などでは、むしろ恵まれていたということがいえるのではないでしょうか。

与謝野晶子とはあまりにも対照的なことが、登美子を薄幸の女流歌人として、固定してしまっているようです。

この時代の女性として、女学校を卒業し、しかもわが国で初めて創立された女子大である、日本女子大学へ進学したことは、当時としては、大変なエリートであったと言わねばなりません。

文学の世界のみならず、当時の芸術を志す人のなかには、夭折した天才といわれたり、あるいは悲運の芸術家といわれたりするような人が何人も実在しています。

例えば、同じ文学を志すものとしては、登美子が心酔する先輩樋口一葉。後輩には石川啄木。美術の世界では、洋画の青木繁。日本画の菱田春草。彫刻の荻原守衛などいずれも華々しく活躍しながらも、貧困、病い、家庭のしがらみなどに苦しみ、志なかばにして世を去っています。

彼等からみれば山川登美子の父貞蔵は、第二十五銀行頭取という経済力と、登美子に対する深い慈愛心を持っていました。父亡きあとも、兄の助力で京都大学の中西博士の診察を受けています。

後世の人が、彼女を薄幸の人としてしまったのは、病気が結核という不治の病であること。与謝野鉄幹をめぐる晶子との争いで身を引き、形の上では恋に破れたこと。もう一つ彼女が清楚な美人であったことが、一層そのイメージを増幅させているようです。

登美子と与謝野鉄幹との恋については、最近では文芸春秋で渡辺淳一氏の連載小説「君も雛罌粟　我も雛罌粟」に、とりあげられています。この中では登美子と鉄幹に、肉体関係があったように語られており、またその他にも二人の間を肯定している創作なども出ています。

たしかに登美子の鉄幹への傾倒ぶりは、単に歌のなかだけでなく、数少ない登美子の下絵の中にも残されています。

物語りゆく絵（山川収造氏蔵）

渇仰の人（山川収造氏蔵）

いずれも後ろ姿ですが、「渇仰の人」では、遍路姿をした鉄幹らしい男が、「物語りゆく絵」と題したものには、女性と相合い傘で歩く旅装の男が描かれており、鉄幹と登美子ということが想像されます。

このように鉄幹を愛し、尊敬しながらも二人が結ばれることはなく、彼女の激しい歌とはうらはらに、現実の関係があったとは思えません。

もちろん、彼女の性格もあるでしょう。この登美子の性格形成に、最も大きな影響を与えたのは、父貞蔵ではないかと思います。歌の道あるいは絵の道を志しながらも、山川駐七郎との結婚のため諦めざるをえず、小浜へ帰ることになって

画筆うばひ　歌筆折らせ　子の幸と
御親のなさけ　嗚呼あなかしこ

と歌ったのも、父さえ許してくれるならば、例え周囲の反対があっても、自分の行く道へ進めたのにという慨嘆の響きが感じられます。

父の仕打ちを恨みながらも、それに逆らえない自分の弱さを嘆いているのでしょうか。登美子は、若狭酒井家の家臣の家柄という名門、第二十五銀行の頭取で、強い力を持った父親の庇護のもとに育ちました。当時の女子としてはかなり自由に勉強させてもらいながら、自己抑制が強く、現代風にいえばファザー・コンプレックスがあったのではないかと思います。

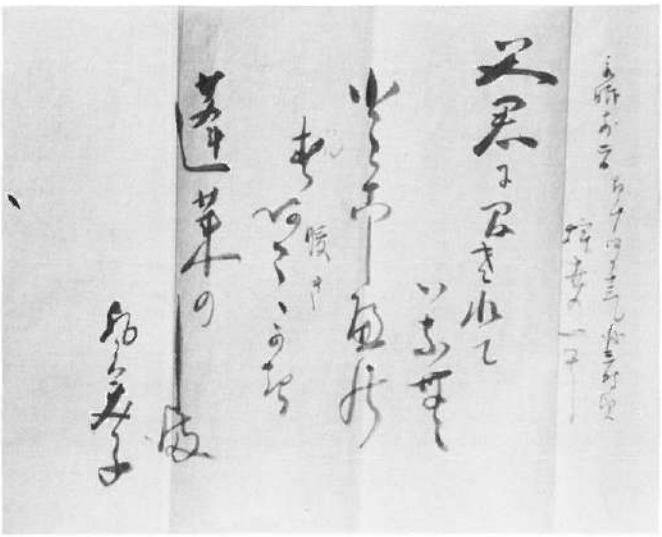
辞世の歌でも

父君に　召されていなむ　とこしへの
春暖かき　蓬莱のしま

と、亡き父への思慕の情を溢れさせています。

よく登美子と与謝野晶子を対比して、堺という土地と、北国小浜との土地柄の違いをあげていますが、それ以上に家において強力なリーダー・シップをとる父の影響が、心の枷（かせ）となって大きな影を落としていると思います。

父貞蔵は、決して当時の一家の主にありがちな、頑固なわからず屋だったわけではありません。梅花女子高へ入れ、更に日本女子大学への進学までさせていることから、極めて進取の気性に富んだ人ということが出来ます。



辞世の歌（山川収造氏蔵）

登美子の進路については、最初から歌の道一筋を志したかのようにみえますが、必ずしもそうではなく、美術を勉強したいと思っていた時期があるようです。

梅花女子高を卒業した後の明治三十一年、日本女子大の創立者となる成瀬仁蔵あてに出した手紙(注)によれば、登美子は、美術にも極めて深い関心を持っていたことがうかがえます。

当時は絵画界では、ヨーロッパ帰りの黒田清輝が白馬会を主宰し、豊かな色彩を持つ新しい絵画がとり入れられてきました。

後に雑誌「明星」には、藤島武二のフランス十九世紀末のアール・ヌーボー風の挿絵が出て、アルフォンス・ミュシャやビアズリーの装飾画の影響が見られます。日本の芸術界全般に、日清戦争後の戦後派(アプレゲール)としての、新しい考え方が出てきています。歌も、従来の花鳥風月を中心とした自然観照の態度から、人の心の微妙なところまで向けられてきました。全く新しい創造の世界が開けてきたわけです。

文学を含めて芸術界全般が、新しい方向を模索していました。

このような時代背景のもとに、結果的には日本女子大の英文科へ入学していますが、登美子はおそらく洋画を勉強して、美術教師または画家としての道を歩みたいと考えていたのではないでしょうか。

登美子自身、小学校のころから絵には興味があったとみえて、図画の成績も習字・読書などと並んで優秀なものでした。子供のころの成績の善し悪しが、そのまま大人の世界まで持続するほど単純ではありませんが。

たとえば先に掲げた「画筆うばひ……」の歌にも、最初から画筆という言葉が出てくるところに、歌と同様に絵を描きたいという強い気持があったことがわかります。

登美子の人生は短いですが、かなり波乱に富んでいます。このそれぞれの場面にいくつかの方向があり、その選択の鍵を握っていたのは登美子とともに父貞蔵です。

新しい芸術の世界に足を踏み入れながら、登美子もまた、肉親との強力なきずなから抜け出ることは出来ず、そのことが一層内面の成長を促し、華やかな作品として熟成したのではないかと思います。短い人生だからこそ、その創作活動が充実していたのでしょう。

(若狭歴史民俗資料館　副館長)

(注)

明治三十一年　登美子が数え年二十才のとき書かれたもので、公刊された登美子の書簡の中では最も早い時期に属する。

(角川書店刊　短歌　一九七六・十二　山川登美子に関する新資料)

山川収蔵あて絵ハガキ

■展示品解説（一部）

1、歌稿ノート（大・中・小）

（福井大学附属図書館蔵）

登美子が病床の下にいれて、持っていたノートで、大学時代の書きかけのものなどを転用して使っています。詠草、雑文、金銭出納、随筆などを書いています。

14、辞世の歌（山川収造氏蔵）

亡くなる二日前の明治四十二年（一九〇九）四月十三日に看病していた末弟亮蔵に手渡したものです。その頃亮蔵は腸チフスが治って実家におり、療養かたがた母と二人で、登美子の世話をしていました。

父君に　召されていなむ　とこしへの
春あたたかき　蓬莱のしま

24、牧せん子あて絵ハガキ

（山川収造氏蔵）

牧せん子は日本女子大時代の友達。若い女性同志の手紙らしい明るい文章で、登美子の別の一面があらわれています。サンキューとかオーソリティーなど英語の言葉が出てくるのも、時代の先端をいくという心意気がみえています。

40、恋衣（山川収造氏蔵）

登美子が日本女子大に入学した翌年明治三十八年（一九〇五）刊行された歌集で、登美子と与謝野晶子・茅野雅子の三人の共著。大学当局の怒りにふれ、停学処分となった。挿絵と装丁は中沢弘光。

この処分に対して

歌よみて　罰せられきと　光ある
今の世を見よ　後の千とせに

と歌っています。

46、寄せ書き扇（福井大学附属図書館蔵）

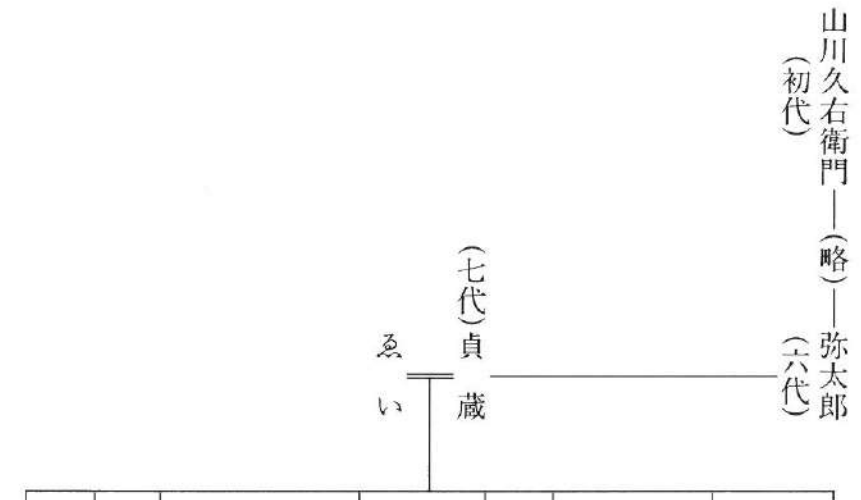
明治三十三年（一九〇〇）八月六日に堺の寿命館で、与謝野鉄幹が来て歌会が開かれた時に、参加者が揮毫したもの。登美子、鉄幹、晶子のほか、大槻月啼、河野鉄南、中山梟庵、宅雁月、高須梅渓と関西の歌人たちが署名しています。

表紙写真説明

左側の写真は、明治四十一年・二十九才の時撮影したもので、裏面に「京都市寺町通高辻北入写真師・堀真澄」の名があります。

右の写真は二十代前半ごろのようです。

山川家系図（登美子を中心とした）



山川登美子年譜

年　号	西暦	年齢（数え年）	事　　項
明治12	1879	1	7月19日福井県遠敷郡竹原村で生まれる。父貞蔵 母ゑい 上に2男3女がいる
明治19	1886	8	雲浜村琢成小学校（現雲浜小学校）に入学する
明治23	1890	12	琢成小学校を卒業。高等科小浜小学校に入学する
明治27	1894	16	雲城高等小学校（改称）を卒業。生花、琴、習字、和歌などを習う
明治28	1895	17	大阪梅花女学校（現梅花女子大の前身）に入学。長姉いよの婚家　河久右衛門宅に寄寓して通学する
明治30	1897	19	梅花女学校邦語科を卒業。山田流琴を習う。雑誌「新声」にはじめて短歌を投稿し入選する。
明治33	1900	22	梅花女学校の研究生となり英語を専修する。東京新詩社より「明星」が創刊され、第二号に短歌一首が掲載される。8月初旬与謝野鉄幹、鳳晶子らと大阪にて対面し、浜寺・住の江などで遊ぶ 10月頃山川駐七郎との縁談が具体化する。11月鉄幹・晶子と京都東山の永観堂(禅林寺)で紅葉を観賞し、辻野旅館で一泊する。12月駐七郎と仮祝言をあげる
明治34	1901	23	1月短歌「もろかりし」34首を「明星」に発表する。4月結婚式をあげ、牛込矢来町に新居を構える。駐七郎は病気のため外務省を休職し、銀座の江副商店に勤務中である。8月与謝野晶子「みだれ髪」を刊行して反響を呼ぶ
明治35	1902	24	夫の病気療養のため帰省する。12月看病の甲斐もなく夫駐七郎死去
明治36	1903	25	離縁して生家に復籍する。長兄久太郎肋膜炎のため死去
明治37	1904	26	長姉いよ死去。4月上京して日本女子大学英文科に入学し、芙蓉寮に起居する。同時に入学した増田雅子との交友が深まる。夏から秋にかけて鉄幹によって企画された雅子・晶子との共著「恋衣」の刊行が大学当局の怒りにふれ、雅子と登美子は休学処分となる。与謝野晶子の詩「君死にたまふことなかれ」が物議をかもす
明治38	1905	27	1月「恋衣」を本郷書院より刊行したが、父の怒りを買いしばらくは学業に専念する。級の代表者・寮の委員などをつとめて活躍する。「恋衣」は2版・3版と版を重ねる。11月急性腎臓炎のため駿河台の高田病院に入院する。更に夫から感染したと思われる呼吸器疾患にかかる
明治39	1906	28	4月から学校に復帰するが健康にすぐれず欠席がちになる。7月帰省の途中京都大学附属病院の中西博士の診察を受けたところ肋膜炎と診断され、そのまま京都に滞在し療養する。このころ京極流箏曲の鈴木鼓村に師事する
明治40	1907	29	3月病気回復が思わしくないため日本女子大学を中途退学する。夏ごろには病状が一時好転し、姪たちの勉強相手などもつとめる。12月父貞蔵胃腸病・感冒症を併発して大病となる
明治41	1908	30	1月父死去。父を亡くした精神的なショックも加わって、病状が悪化し3月まで病臥する。「明星」5月号に「日陰草」14首を発表し、これが最後の寄稿となる。11月「明星」は100号にて廃刊となる
明治42	1909	31	3月腸チフスを患っていた弟亮蔵が回復して帰省し、母と共に登美子の看病にあたるが、4月になると病状が次第に悪化する。13日辞世の歌1首を亮蔵に渡し、15日午後には母にみとられ満29才9ケ月の生涯を閉じる。小浜市伏原の発心寺に葬られる

※この年表は坂本政親著「山川登美子」をもとに作成した

出品目録

1	歌稿ノート（大・中・小）	3冊	福井大学附属図書館蔵
2	山川登美子女史雑詠記録（土田若州編）	1〃	〃
3	English	1〃	〃
4	和歌組題（428首）	1〃	〃
5	詠草	1〃	〃
6	雑記	1〃	〃
7	古和歌筆写	1〃	〃
8	日本魄	1〃	〃
9	ノート（ペン書き）離鸞賦	1〃	〃
10	琴うた　山田流　琴詠	1〃	〃
11	土佐日記　巻の上	1〃	〃
12	短冊	4枚	山川収造氏蔵（小浜市立図書館寄託）
13	兄　追悼歌３首	1〃	〃
14	辞世の歌１首	1〃	〃
15	歌稿（鉄幹添削の歌稿）	1〃	〃
16	おもかげ草紙	1冊	〃
17	自賛歌	1〃	〃
18	山川登美子写　土佐日記・更級日記	1〃	〃
19	雑筆（あるあらぬものの上にただ想像の人）	8枚	〃
20	歌稿と絵　渇仰の人	5〃	〃
21	物語りゆく絵	5〃	〃
22	歌稿	5〃	〃
23	書簡（兄あて・茅野雅子あて・封書）	5通	〃
24	山川登美子絵ハガキ（収蔵・勉三・蒲田淳介・牧せん子・土田数雄・増田まさ子あて）	6通	〃
25	大学欠課御届試書（女子大学あて）	5枚	〃
26	山川登美子あて凹凸医者よりのハガキ	1通	〃
27	与謝野寛・晶子連署書簡（山川収蔵あて）	1通	〃
28	与謝野寛書簡（山川銓次郎あて）	1通	〃
29	登美子自筆　扶桑寮より差し出しの封筒	1通	〃
30	吉井公平書簡（山川銓次郎あて）	1通	〃
31	山川登美子より成瀬仁蔵あて書簡	1通	日本女子大学成瀬記念館蔵
32	山川登美子ハガキ（山川銓次郎あて）	1通	〃　（山川収造氏旧蔵）
33	山川登美子写真	3枚	山川収造氏蔵（小浜市立図書館寄託）
34	山川登美子関係写真	一括	坂本政親氏蔵
35	大阪梅花女子校同窓会会報　21号	1冊	山川収造氏蔵（小浜市立図書館寄託）
36	日本文学（立教大学）第12号　浜名弘子	1冊	〃
37	絵ハガキ（若狭の登美子）	1冊	〃
38	「明星」（明治39年５・40年５・41年５）	3冊	〃
39	「明星」（１～100号）合冊本		坂本政親氏蔵
40	「恋衣」　山川登美子・増田まさ子・与謝野晶子共著	1冊	山川収造氏蔵（小浜市立図書館寄託）
41	「恋衣」　再版	1〃	坂本政親氏蔵
42	「毒草」　明治37年	1〃	〃
43	「うもれ木」　与謝野鉄幹作　明治35年	1〃	〃
44	「女子文壇」（第１年　第８号）	1〃	山川収造氏蔵（小浜市立図書館寄託）
45	「佐保姫」　与謝野晶子著	1〃	〃
46	寄せ書き扇子　明治33年	1〃	福井大学附属図書館蔵
47	歌屏風　与謝野寛・与謝野晶子合筆　昭和８年	1隻(8曲)	武生市　本山毫摂寺蔵
48	歌色紙　与謝野晶子　昭和８年	1枚	〃
49	歌軸「夏草」　画／平福百穂　歌／与謝野晶子　大正13年	1点	堺市博物館蔵
50	与謝野晶子短冊（軸仕立１）	2点	高浜町　専能寺蔵
51	与謝野禮厳短冊（軸仕立）	1枚	〃
52	禮厳法師歌集　明治43年	1冊	〃

＊一部展示替えすることがあります